



校長室だより 39号

中 島 悟

【キャッチフレーズ】

未来に残そう 伝え築いた 振徳商業
目指せ 三種目 日本一 !

【来週の行事】 1月23日(日) 全商簿記検定
24日(月) ~全商情報処理検定課外

- 1 「高校生活の思い出」 26回卒 山本 梢 30周年記念誌より抜粋
2 出逢ったいい話『おかげさまという生き方』(10代の君たちへ)東井義雄著抜粋

「高校生活の思い出」(一部修正) 26回卒 山 本 梢

ある日の夕方、母校から届いた1通の手紙を読んで、困惑した私は、当時の事を思い出す為に、高校の時の友人と一緒に昔の写真や卒業アルバムに目を通してみました。

1ページ1ページとめくっていくうちに、「部活動」という文字が目にとまりました。

中学、高校と部活一色だった私にはとても懐かしく印象的なページでした。私の入部していた部活は、女子ソフトボールだったのですが、部員が少なく、2学年合同のチームでしたので先輩、後輩の仲も良く、よく友人からうらやましがられていました。

活動の方とはいうと、毎日の放課後にボールが見えなくなるまで練習をして、休日もほとんど練習試合や、他校との合同合宿などがあり、最終目標の高校総体優勝を目指して、顧問の先生と私達部員全員が一丸となってがんばりました。その結果、高校3年の時の高校総体で、後輩に助けられ県3位という今までにない結果を残すことができました。

そんな忙しい部活にヘトヘトになりながらも、毎月のようにある検定と自分の希望する進路に向けて、時には遊びたいという気持ちを抑えながらがんばりました。検定前には、放課後の補習が終わった後も、友人と一緒に分からない所を教え合ったりもしました。結果的には、落ちた資格もあったけど、その後の努力により多くの資格を取る事が出来ました。

高校生活も最終学年となり、部活動も終わって体育祭という大きなイベントを迎え、一度経験していた事のあるリーダーに再挑戦する事に決めました。放課後はみんなで集まって応援の振り付けの練習をしたり、応援で使う道具を作ったりと、少ない時間でがんばりました。クラスのみならず協力を得て、全員で取り組んだ応援が出来ました。結果、競技の部で優勝をおさめることが出来たものの、数日後に就職試験を控えた私は、余韻にひたる間もなく試験対策の勉強に励む事になりました。

当日、台風接近により試験が延期になる等のハプニングに見舞われたものの、合格通知を手にすることが出来ました。就職も無事に決まり、残り少ない高校生活をより有意義に過ごす事が出来ました。

楽しかった3年間で振り返りながら、アルバムの最後のページをめくると、そこには一緒に過ごした多くの友達からの寄せ書きがあり、私の過ごした3年間は大きなものであったと再確認することが出来ました。

そして、これまで出逢ってきた人々、これから迎えるたくさんの出逢いを大切にしていきたいと思いました。

出逢ったいい話 『おかげさまという生き方』

東井義雄著「10代の君たちへ」の話の中から抜粋して紹介します。

これは薄っぺらい本ですがね。山口県の木村ひろ子さんという女の方が、左足でお書きになった本です。左手ではなく左足です。木村さんは生まれてまもなく脳性麻痺という病気にかかれ、両手両足が動かんようになってしまった。ものを言えんようになった、左足が少し動くんだそうです。その上、3歳の時、お父さんが亡くなられ、13歳の時、お母さんが死んでいかれました。両手両足が動かない。お父さん、お母さんもない。想像できますか。何が一番辛いでしょう。女の方は想像できますか？ 同じように、脳性麻痺の17歳きみちゃんというお嬢さんがこんな日記（詩）を書いています。

「ひとつの願い」

お便所に一人で行けるようになりたいです。

それが私の願いです。

たった一つのお願いです。

神様、神様がいらっしゃるなら

私の願いを聞いてください。

歩けないこと。

口がきけないことも我慢します。

たった一つ お便所に

一人で

一人で行けるようになりたいのです

お願いします

真剣な願いでしょうね。誰か親切な人が連れて行ったとしても、手が動かんのですから、自分で後始末ができません。辛かったでしょうね。木村さんも、「手洗いに人のお世話にならずに行けるようになるまでは、飲まないぞ、食べないぞと頑張ってきました」とお書きになっている。

お友達が小学校に行くようになると、私も学校に行って賢うなりたい。しかし、学校には行けなかったの、家で、わずかに動く左足で、一生懸命字を覚えた。

「不就学 嘆かず左足に 辞書めくり 漢字暗記す 雨の一日」

「左足に 米とぎかしぎ 墨をすり 絵をかきて生く ひとすじの道」

左足でお米洗って、左足でご飯炊いて、左足に墨をはさんで墨をすり、左足に筆を挟んで絵を描いて、その絵を売って生きていらっしゃるのです。しかも、これだけなら、自分のために生きとるに過ぎないじゃないか。自分のために生きとるというなら、毛虫だって自分のために一生懸命に生きとるやないか。せつかく人間に生まれさせていただきながら、毛虫と一緒に申し訳ないじゃないかということで、この左足でお描きになった絵の収入の中から、毎月、体の不自由な皆さんのために、お金を出しておられる。そして、

「わたしのような女は、脳性麻痺にかからなかったら、生きるというただ事でない尊さを知らずに過ごしたであろうに、脳性麻痺にかかったおかげさまで、生きるということが、どんなにすばらしいことかを、知らしていただきました」

脳性麻痺にかかったおかげさまで、生きるということはそういうことなんですね。

どうか皆さんも体のどっかに、不自由なことがあっても、このために死んでやろうとか思わないで、胸に手を当てた時、ドキドキしていたら仏様が「辛かろうけど、しっかり生きろ」とおっしゃっているだろうと考え直して、そして、このおかげさまでという受け止め方で、生きる生き方を求めていると思います。